

こんな教科書、子どもに見せたくない！ 道徳教科書でお母さんたちと学習会

7月5日、新日本婦人の会大津支部のみなさん10人が参加し、18年度から小学校で使用される予定の道徳の教科書の学習会を行いました。

竹腰全滋賀教組委員長を講師に、8社すべての教科書を見ながら、教科書の内容、評価のことについて話し合いました。

教科書本文には、オリピックを通じて「愛国心」をかきたてる内容、立志伝

中の人物、「日の丸」の写真などが掲載されています。さらに、「起立して国旗に対して姿勢を正し、帽子をとって礼をしましょう」とおじぎの仕方を強制したり、「国歌が流れたらみんなでいっしょに歌います」など

国旗・国歌の見方を植え付けていることなどを説明すると、参加者の多くが「こんな教科書を使用するのは問題だ」「こんな教科書を子どもに見せたくない」「さっそく、問題点をみんなに知らせよう」などの声があがりま

りました。最後に、竹腰委員長は保護者の声として「この教材が子どもにあっていますか」「価値の押しつけになっていませんか」などの率直な意見を教育委員会などに寄せてほしいとお願いました。



栄冠に輝いた八日市養護チーム

自由に、安心安全に、手軽に取り組める状況でないことに社会の未熟さを感じた。「ドッチビー」初めて知ってどんなものかドキドキわくわくしながらの参加。いろんな人に会えて、試合にも出させてもらっていい気分転換になった」「やっぱりみんなで身体を動かせる交流できるスポーツはいいですね」「子ども連れできて、気兼ねなく子どもを任せられ、母はスポーツで大はしゃぎできる集団って本当にありがたい素敵ですね」「共通の目的をもって、努力しあうとか、支え励ましあうとか、大事な。最後はチームの枠を越えて盛り上がる展開でよかった」など多くの感想が寄せられました。

教部 障害青年 滋賀

「大人の本気」で八日市養護チームが優勝 ニュースポーツ講座&ドッチビー大会



部は、6月11日(土)、2月に大雪のため開催が延期となっていたスポーツ大会を野洲養護学校で開催しました。各障害児学校で、大会に向けて練習したり、若い先生たちに参加を呼びかけ、当日は41名の参加がありました。

前半は、講師の下井一夫先生(フラインクディスク協会)から「障害者スポーツの歴史と現状」、「ニュースポーツの紹介」がありました。またフラインクディスクの投げ方のコツや生徒への指導方法なども教えてもらい、学校に持ち帰って活かせる内容が盛りだくさんの講座になりました。

そしていよいよ始まった白熱のドッチビー大会。各チームで作戦を練り、合間に練習したり、各試合ではまさに「大人の本気」を見



るような試合となりました。結果は、当日までコツコツと練習を積み重ねてきた八日市養護学校チームが全勝と、文句なしの優勝となりました。

また、夜の部の親睦会にも15名の参加があり、普段忙しくてなかなか話せなかった人たちが、学校を越えた交流もでき、時間を忘れるほどの楽しい会となりました。この取り組みに向けては、各校でドッチビーの練習だけでなく「夕(煙火)上(ナイフ)」や「ティーパーティー」を開くなど、工夫を凝らした交流を重ねてきましたし、そのおかげで、学校内でのつながりが大変深まりました。参加者からは、「障害児・者の余暇というか、1つの文化としてのスポーツが、

全滋賀教職員組合

発行人 竹腰宏見
大津市朝日が丘1丁目11-3
教育文化会館
tel (077) 522-4965
fax (077) 522-4978

全滋賀教組 UNITE!

2017年7月20日

教え子を再び戦場に送るな

第19号

これ私たちが配るの？と逡巡した教師たち 「国が配らせている」とピンときた保護者 “ミサイル飛来に伴う対応” 文書配布についてシンポジウム開催



「弾道ミサイル飛来に伴う対応」文書配布について考えてみよう、というシンポジウムが、6月26日守山で開催されました。2つの市民団体と全滋賀教組、滋賀県教組との4者共同開催が実現しました。

4月24日、教師は「これ私たちが配るの？」と逡巡し後ろ髪を引かれながら子どもに配布しました。受け取ったお母さんたちは「何でこれ学校が配るの？戦争が始まるってのと一緒

じでしょ」と驚きました。教師も親も「戦争する国づくり」がすぐそこまで来ていることを肌で感じました。シンポではまず教師、保護者、市民がそれぞれ思いを語りました。また会場からも、モヤモヤ感をすっきりさせるかのようにも次々に発言が続き、爽快感と連帯感に包まれました。

滋賀県教組と共同開催 お母さんたちの抗議行動

シンポジストだけでなく会場には多くのお母さんの姿がありました。

「言われるまで気がつかない校長(Aさん) びっくりしたので校長先生にお願いしますと伝えました。『お母さんに言われるまで気がつきませんでした。ただ教育委員会から来たものを配らないうという判断はできません』と校長。

「何でこんなことが、と怒り(Bさん) 文書を見て『何でこんなことが。恐ろしい』と居ても立ってもいられず、まずフェイスブックに投稿、翌日には校長先生や草津市教委に会って話をした。『万が一の事態から子どもの安全を守るため』と丁寧に答えてくれたが怒りはおさまらず。一方フェイスブックには今までにない反応が寄せられた。

教師のための、後悔、今後の不安

「配らない選択ができるか自信がない(中学校教員) 在日の子たちが一体どういう思いで文書を持って帰ったろう。すごく腹立たしい。文書は、だから軍備を強化しな、いかんねん」という考えを植え付けることになる。ただ配れと言われた時に私が配らない選択ができるか自信がない。日頃から平和とか人権の話をするのがあたりまえという環境が学校の中で作られていたらいかが。

「竹槍訓練のようになるのかと情けない(高校教員) 私は他の主任や教務に「出すべきでない、コンクリート造りの建物に避難してどないなるの」と強く主

自由な、安心安全に、手軽に取り組める状況でないことに社会の未熟さを感じた。「ドッチビー」初めて知ってどんなものかドキドキわくわくしながらの参加。いろんな人に会えて、試合にも出させてもらっていい気分転換になった」「やっぱりみんなで身体を動かせる交流できるスポーツはいいですね」「子ども連れできて、気兼ねなく子どもを任せられ、母はスポーツで大はしゃぎできる集団って本当にありがたい素敵ですね」「共通の目的をもって、努力しあうとか、支え励ましあうとか、大事な。最後はチームの枠を越えて盛り上がる展開でよかった」など多くの感想が寄せられました。

張したが、管理職はまじめに「万が一のためにしておかない」と、教務も「やりましたというのが大事」と押し切られ、帰りのSHRで教室掃不することを言った。戦前の竹槍訓練のようなものかと思えない。これ配るんですか？」一言だけだった自分に愕然（小学学校教員）



「私が言えたのは「これ先生、配るんですか？」だけだった。一言だけしか言えなかった自分に愕然とした。学校は多忙化で考える力を奪われているが、学校の外では止めようとしてくれていた人たちがいる。「先生、これおかしいで」と声をかけてほしい。私は「教養子を再び戦場に送らない」ということを実現できる教師でありたい。」

▼学校がヘイトスピーチの場になる（「子どもと教科書 市民・保護者の会」Kさん）

在日の方は恐怖だったのではないか。今回の指導要領の「日本人としての自覚」を大事にせよという徳目の強調は、学校がヘイトスピーチの場になると言えるものだ。

先生への叱咤や共感の場が連帯を広げる

▼（母親Fさん）学校に抗議に行ったが、そういう行動をすることが先生への応援になると今改めてわかった。気持ちを共有し共同で進めていくことが大事なんだ。

▼（母親Gさん）「文書配布を止めようとした先生もいたよつだが、やっぱり配

てほしくなかった。想いを共有できるという場がもっと必要だと思う。

▼（市民の会しが）教員内部でも教育委員会内部でもいろんな葛藤があったのではないか。そういう葛藤を引き起こしたものが憲法の力だと思ふ。確信を持たないといけないんじゃないか。こういう集会が憲法の民主主義を生かす一つの力。

▼（大津の自民会会長さん）自治会には降りてきてない。それをせず教育に植え付ける、それが許せない。大臣は視察旅行に行き危機感がないのに「子ども」を使ってそんなことをするのは非常に腹立たしい。

▼（弁護士）政府が戦争政策を進める時には教育を利用する、その表れだ。戦前戦争がおれば命を差し出せと徹底した教育が行われて、戦争政策が遂行できた。安倍首相は憲法を変え。抑止力で平和を守ると言っている。今回の件は平和憲法を壊すための地ならしと見て良い。

▼（全滋賀教組）周りが文書を配ろうとしている時に自分は配布しないというのは難しい。それが多くの組



今度はタダではすまさん

▼「おかしいね」の輪を広げよう（中学校教員）

お母さんから指摘があった東近江市の中学校教員。これを言わずに帰ったらア

カンかなと思ひ（爆笑）。私も意見は言いましたが配布した一人だ。でも今度は絶対にタダではすまさんと決意した。多くの先生も同じ思いでいると思う。しもたことしたなあ。あの時なんか一言言っといたら良かった。教育委員会の中にも

いると思う。配布しなかった教委もあるのにうち配ってしまったと。こういう経験が今後に生かされる。

そして、もやもやした気持ちを伝えたら共有しあえた、こういう経験が大事だ。それを聞いて勇気づけられた。今日来たら攻められるんじゃないかと思つてたが、来て良かった。

▼批判のできる子どもたちを（司会のお母さん）

国がやりたいと思つてい

ることがスツと通つてしまふというのは非常に危なっかしいと思う。先生方に望むことは政治利用はされな



▼生徒が科学的に判断できるよう授業を（高校教員）

6月23日の政府広報も含め、生徒に正直どう思った？とアンケート。「不安」「怖い」「まさか先生からこんな話を聞くなんて。先生から聞くという事は、ありうるんかと思つた」と。一方、「そんなんで助かるわけないやん」「飛んでこないようにするのが政府の仕事やのに」って怒

てる子も。生徒たちが、科学的に冷静に、どういふふうにおかしいことなのか判断できるように、ちゃんと授業をしていきたい。

▼おかしいと判断できる人を増やす（中学校教員）

これはおかしいと判断する知識を持たないといけない。多忙で時間がないのが現状だがそれではいけない。またそれを一緒に働いて

▼運動こそが世論を作る（教科書の会）

教育委員会に一人でも物を

を言えるようになっていかないと。そのためには周りに雰囲気ないと言えない。雰囲気とは何か。それはやっぱり運動なんだ。運動を意識的にとりこんで行く。その中で一人でも教育委員会に言えるようになっていくことが大切。今日はものすごく勉強になった。

▼教育を変えたいという意図がわかりやすい（お母さんBさん）

プリントに対する怒りはあったが先生への怒りはな

かった。これを配ろうとしたのが国やというふううにピンときたからだ。国が配りたかったのはなぜか？安倍政権が憲法9条を変えたい教育を変えたいということが、すつとくわかりやすい形で表に出たのが今回。戦争したい、敵を作っておきたいということがわかってきた。

先生に望むことは、戦争をした今この政府から、子どもたちや私たちのくらしを一緒に守ってほしいということ。みなさんのいろいろなお話をきいて心強かった。私がしてきたことは間違つてなかつたと受け止め

▼「くらしと教育カフェ」を提起

そこで大きなことはできないが、小さな場を作っていく。くらしと教育カフェをしよう、その第1回を7/8にしたい。お茶でも飲みながら結論は出ないかもしれないが、力になっていけたらと思う（7/8は30人参加で成功）。

参加できなくてもフェイスブックなどで情報を拡散して共有したい。分断されてはいけないと思つてる。

福井雅英さん（市民の会しが代表）のまとめ

内閣府の指示に教育が押し流された

今回特に問題なのは文科省からでなく、県の防災危機管理局が危機管理という筋から降ろして来たということ。その上は内閣府の危機管理担当です。我々からみたら根拠のない物事が、国が危機だと判断したことにより教育が押し流されたわけです。

6月23日からネット、テレビ、新聞を使って「ミサイルが飛んでくる」と大宣伝しています。この情報そのものを吟味するというのが大事で、危機があるのか、あるならどう対処するのが正しいのか、教育は学校は何



合員。ただ「仕方なかった」が積み重なって戦前のようになってしまつては。今回教委に抗議に行った保護者など多数いた。そういう動きが教師と子どもと教育を守ることになる。だからこそ市民との共同のとりくみが大切だ。

▼「おかしいね」の輪を広げよう（中学校教員）

お母さんから指摘があつた東近江市の中学校教員。これを言わずに帰ったらア

カンかなと思ひ（爆笑）。私も意見は言いましたが配布した一人だ。でも今度は絶対にタダではすまさんと決意した。多くの先生も同じ思いでいると思う。しもたことしたなあ。あの時なんか一言言っといたら良かった。教育委員会の中にも

世界でも突出した日本政府の異常な対応

日本の今回の対応は異常です。韓国のハンギョレ新聞（4/21社説）は『度を越した日本の“朝鮮半島危機説”煽り立て』と題し批判しました。20万人が韓国に居住する米

国でも特別な動きが見られないのに、連日大げさに騒ぐのは、単純に有事の備えのためだけではない、「朝鮮半島危機説」を煽り立て、自衛隊の武装強化と安倍政権の国内政治上の危機を乗り越えようとする意図」などと書いています。

一方私たちは煽られているとい判断が困難です。根拠のない情報に乗せられてしまうという状況になっていないか、それこそが本場の危機ではないでしょうか。

戦争の反省が邪魔な安倍政権

二点指摘します。一つ目は、戦後の教育の根本には戦争反省がありました。その反省が地方自治や教育の自立性を大事にする制度をつくりました。

その戦争反省が邪魔になつていっているのが今の安倍政権の根本です。6月23日、沖繩慰霊の日、戦争が生々しく語られる沖繩が邪魔なのです。「みんなで共有しよう」という今日のシンボも、教育とは何なのか、何が大事なのかを問い直す貴重な機会になりました。教育が政治のプロパガンダとして利用され、教育の自立性を奪つたという点は許せませんが、そのプロパガンダそのものを問い直すという判断力を我々は求められています。

朝鮮半島の緊張にどう対応するのか

二つめは、「朝鮮半島危機説」をどう見るかです。読み解く力が我々に求められています。ミサイルが飛ばないようにするにはどうすればいいのか、アメリカから自立していればもっと説得力のある力を発揮できたのではないか。韓国では文大統領が冬季オリンピックに北朝鮮のチームと応援団、一緒にやろうと呼びかけました。そういう平和的な努力を日本政府が全くやらずに、危機を煽つて軍事的対応に走っているのです。

市民の力、国民の判断力を高めること

市民の力、国民の様々な政治的な判断力を高めることが大きな課題です。教育と政治の関係、政治のあり方を考え、先生方には教師としての原点として何を考えるかを問い直すことが引き続き求められます。今日はそんなスタートになったかなと思ひます。